明美ちゃん基金 途上国にも拡大

貧しいがゆえに生きられないのですか―。重い心臓病で苦しむ少女の両親の訴えに、全国から集まった義援金をもとにスタートした「明美ちゃん基金」。32年間、善意の寄付は絶えることなく、国内にとどまらず世界の子供たちの命を救ってきた。このほど、発展途上国での難病に苦しむ子供たち医療活動にも適用されることになり、基金は新たな歴史を刻もうとしている。

ひとのハートはあったかい

明美ちゃん基金

●基金の歩み

明美ちゃん基金は一通の投書から始まった。

昭和四十一年六月七日付の産経新聞夕刊に「私の命はあと二年 手術のあてなし」という見出しの記事が載った。生まれつき心臓の左右の心室を仕切る壁に穴がある鹿児島県指宿（いぶすき）郡頴娃（えい）町の伊瀬知明美ちゃん＝当時＝。医師から「余命はあと二、三年」と宣告され、両親は娘を救おうと奔走したが、当時五十万円の医療費が用意できず、思い余って東京本社に手紙を書いたのである。

この記事は大きな反響を呼び、読者から「明美ちゃんを助けてあげて」と、主婦、高校生、職場のグループなどから善意の寄付が次々に寄せられ、東京、大阪両本社で合計六十六件、二百六十八万六千三百九十七円に達した。

明美ちゃんは記事掲載から、週間後、東京女子医大病院で手術を受け、元気になった。

その後も寄付は増え続けたことから、産経新聞は「明美ちゃん基金」と名づけて寄付を原資に基金を設立。ほかにも明美ちゃんと同様に先天性の心臓病で苦しんでいる子供たちを救う キャンペーンをスタートさせた。明美ちゃん基金によって、経済的に恵まれない多くの子供たちが手術を受けられるようになった。また、キャンペーンが推進力となり、国や自治体の心臓病対策も大きく前進。医療費は医療保険や公的扶助でカバーされるようになった。

「明美ちゃん基金」のあて先は〒530―8277大阪市北区梅田2ノ4ノ9 産経新聞大阪本社「明美ちゃん基金」事務局へ、現金書留で。銀行振込は東海銀行桜橋支店、普通口座369554、明美ちゃん基金まで。

「幼い命」へ広がる愛

32年間善意絶えず…世界中につなげて

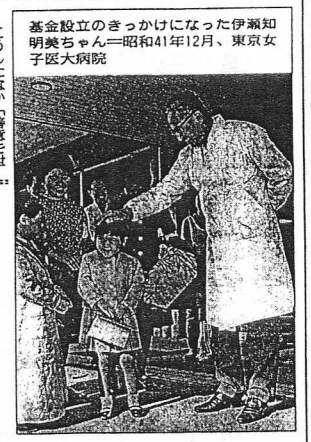
こうしたなか「善意を世界にも」という意見が関係者から提案された。発展途上国には貧しく、十分な医療に恵まれない子供たちがたくさんいる。基金に新たな社会的使命が与えられたのである。

昭和四十七年一月、外国人適用第一号として、インドネシアのクリニアワン・スリスティオちゃん＝当時3さい＝が来日。東京女子医大病院で、心臓から肺につながる動脈の弁が狭くなっている病気の手術を受けた。その後も韓国、カンボジア、ロシア、エジプト、ペルーなど世界中から心臓病の子供たちが来日、日本のトップレベルの病院で手術を受けている。

五十九年十月、乳幼児に起きる川崎病の後遺症に適用を拡大。北海道帯広市の望月英奈子ちゃん＝当時2さい＝が手術を受けた。

さらに六十一年十月、小児の移植医療も加えられ、沖縄県恩志川市の先天性胆道閉鎖症の金城結麻ちゃん＝当時一歳十カ月＝が渡米し、ボストン小児病院で肝移植手術を受けた。

一方、五十三年からは学術研究への支援に基金を拠出し、小児難病の対策に役立てられている。



基金設立のきっかけになった伊瀬知明美ちゃん＝昭和41年12月、東京女子医大病院

ダニエル・タン・シャン・フィーちゃん（マレーシア）＝平成2年7月、国立循環器病センター

毎月、感謝の気持ち込め

●恩返しの父

定期的に基金に善意を寄せてくれる人も多い。大阪府岸和田市内で陶器店を営む男性（35）もその一人。十年以上にわたり毎月一万円ずつ寄付してくれている。

「今でも、あのときのことは忘れられません」。この言葉を聞いて、一枚の古い診察券を見せてくれた。

昭和六十一年夏、中学三年生だった二女が、盲腸の手術を受けた際の輸血が原因でウイルス感染し、劇症肝炎になった。五十人分もの大量の血小板を入れ替える治療が試みられたが、医師は「成功率は五％」と説明した。二女は点滴を受けながら、もうろうとする意識のなかで「おとうさん、私もう死ぬの」とつぶやいた。男性は治療が終わるまで何時間も病院の廊下で「自分はどうなってもいいから、どうか娘を助けてください」と神仏にすがるような思いで祈り続けた。

治療が終わると、それまでは色だった二女の顔色がさくら色に変わっていた。

やがて目を覚まし「お父さん、おなかすいた」と言葉を発したとき、「奇跡が起きた」と実感したという。

その後、知人に明美ちゃん基金のことを知らされた。「こうしてみ、娘がいるのも、お医者さん、看護婦さん、血をくれた人たち、そのほかお世話になった大勢の人のおかげ。今の感謝の気持ちを絶対、忘れたらあかん」

男性は毎月、基金の口座にお金を振り込むと、かならず控えの伝票を店のレジの壁に重ねて張っている。その都度、あのころの気持ちを確認するのだという。

泳げるほど元気

力強い筆跡 読者に感謝

●ニキタちゃん

力強い、しっかりした筆跡の手紙がこの秋、産経新聞に届いた。「ぼくはプールで泳いだり、歌って踊ったり元気にしています」。

明美ちゃん基金が適用され、平成四年九月に東京女子医大で心臓手術を受けたロシアのニキタ・トライニンちゃん（3さい）からだ。極えられた写真には、見違えるほど成長したニキタちゃんの姿が写っている。

同じ年の友達とともに九月から小学校一年生となった。「好きな科目はチェス、英語、算数、書き方です。水泳教室ではクロールと背泳を練習しています。日本語も話せるように勉強したいです」

少し歩いただけで唇が紫色になり、同年代にくらべて格段に体が小さかったニキタちゃんも、いまでは同級生を追い抜くほど大きくなった。手術で治った心臓が、体の成長を十分に支えていることがよくわかる。

生後まもなく心臓病であることを知った父親のドミトリーナさん（28）や母親のエレーナさん（28）ら家族にとって、これらすべてがまるで夢のようだという。夫妻はいまでも毎年欠かさず、クリスマスカードを産経新聞に送り、基金を支える読者への感謝の気持ちを伝えてくる。

ニキタちゃんは、左右心室を隔てる壁に大きな穴があく心室中隔欠損など三つの心臓奇形が重なる「ファロー四徴症」だった。当時のロシアでは三歳未満の幼児への根治手術の経験がなく、海外で手術を受ける以外に道はなかった。

そんなとき、かつて日本を訪れたことのある知人から、「日本の新聞社が運営している心臓病の児童基金がある」と聞き、その話だけを頼りに、モスクワにある各新聞社の支局に手紙を送った。本紙モスクワ支局に届いたそのうちの一通が、ニキタちゃんに生への希望の灯をともすきっかけになったのだった。

それだけに、明美ちゃん基金の適用対象が広げられ、ミャンマーでの病院建設を支援することになったのを心から喜んでいる。

「明美ちゃん基金が関係した病院ができれば、ニキタのように心臓病を抱える子供にも目が届き、救われる機会も広がるでしょう」と夫妻は話している。

マリクルスちゃん（ペルー）＝平成9年11月、東京女子医大病院

手術前、母親のエレーナさんに抱かれるニキタちゃん＝平成4年9月（下）。7歳になって、見違えるほど元気に、大きくなった（右）

●新地のママ

大阪・北新地のクラブ「ダム」のママ、矢野迪子さんも年の暮れになると、お客さんからの寄付金を届けてくれる。

きっかけは消費税の導入だった。「財布の中に小銭がたまって…」というお客さんとの会話から、小銭をプールして、福祉団体にでも寄付したらどうか、と思いついた。

トイレの片隅にテキーラの空きビンを置き、「感謝れない人たちに…」とメッセージを添えたところ、お客さんが一円玉や五円玉などから出張のついでに立ち寄る常連さんなどは「ごぶさたしてるお詫」と、小さく折りたたんだ千円札を入れてくれたりした。

一年もたつとビンはいっぱいになり、何万円という額になった。さあ、このお金をどうするかと思案していたら、あるお客さんが「そこの産経に持っていったら」と、明美ちゃん基金のことを教えてくれた。基金で手術を受ける子供たちのことが新聞に掲載されたりすると、お客さんとの話題にも上り、「この店のもちょっとは役に立ったやろうか」「寄付できるわしらは幸せやで」などと、グラスを片手に語り合うこともあるという。

財布の小銭…店に募金箱